

(6) 由美が山村の頬をたたいた。

「(6)は、由美の立場から表現されている文だけど、これを山村の立場から表現し直してみよう」この畠中の問題には、私はすぐに答えることができた。鉛筆を取ると、私はノートに(7)の番号とともに次のように書いた。

(7) 山村は、由美に頬をたたかれた。

今度は、どうやら、畠中の予想していた答えと同じだったようだ。彼は満足そうに、先ほどきたネギマをほうばった。

「さて、ここでお立ち会い。(5)と(7)の文だけど、単語の並び方はとても似ているよね」「本当だ、『山村は、由美に…れた』の部分はまるっきり同じだ」木田は少し驚いた。畠中は、木田の反応に満足そうな顔をした。「でもね、(5)と(7)では構造がまったく違うんだなあ」とニヤリと笑った。「まず(5)なんだけど、出来事が2つ含まれている。1つは「由美が泣いた」という(4)の出来事と「(4)の出来事に山村が困っている」というもう1つの出来事だ。この2つを並列してつなげると、木田が最初に答えたように、「由美が泣いて、山村が困っていた」というふうになる。でも、後者の「出来事」に前者の「出来事」を「埋め込む」こともできる。実はそれが(5)なんだ。(5)の構造は、次の(5')のようになっているんだ」

**(5') [山村は (由美に泣か) れた]**

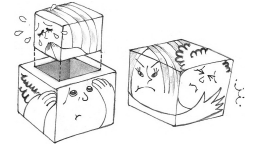
「(5')からわかるように、(5)は「埋め込み構造」をしているんだ」

「次に(7)なんだけど、ここに含まれている出来事は1つだけだ。まず「たたかれた」だが、「たたかれた」には「誰が」と「誰に」と「どこを」という情報が必要だ。ようするに、ここからわかるように、(7)の「山村」と「由美」と「頬」は、「たたかれた」という行為と一緒にあって、1つの出来事を表していることになる。(7)の構造を図示すれば(7')のようになる。(7')を先ほどの(5')と見比べてみよう」

(7') [山村は由美に頬をたたかれた]**(5') [山村は (由美に泣か) れた]**

「(5')と違って(7')は1つの「出来事」のみからできていることがわかるよね。つまり、(5)と(7)の違いは、埋め込み構造をしているかどうかの違いなんだ」

「さて、いよいよ、問題の(1)と(2)と(3)に入っていこう」

**(1) 俺、彼女に髪を切られてしまったんだ。****(2) 俺は彼女に彼女の髪を切られた。****(3) 俺は彼女に俺の髪を切られた。**

「まず、(1)の1つの意味である(2)から見てみよう。(2)には出来事がいくつあるかわかるかな？正解は、2つだ。つまり、「彼女が彼女自身の髪を切った」という出来事と、「その出来事に対して俺は困った」という2つの出来事だ。ちょうど、(5)の場合と同じだね。このことをわかりやすく示すと(2')のようになる」

(2') [俺は (彼女に彼女の髪を切ら) れた]

「次に、(1)のもう1つの意味である(3)を見てみよう。(3)には出来事が1つしかないよね。というのも、「切られた」には「誰が」と「誰に」と「どこを」といった情報が必要だからだ。ようするに、(3)の「俺」と「彼女」と「俺の髪」は「切られた」という行為とセットになって、1つの出来事を表しているわけだ。ちょうど(7)の場合と同じようにね。よって、(3)の構造は(3')のようになる。ここで、(3')を先ほどの(2')と見比べてみよう」

(2') [俺は (彼女に彼女の髪を切ら) れた]**(3') [俺は彼女に俺の髪を切られた]**

「(2')と(3')を見ると、埋め込み構造かそうでないかという点で異なっ

4

語にも規則がある。 ただ覚えているわけではない。

ひきつづき「語」の世界を探検しよう。

普通「ことばに興味がある」といったら、その人が言っている「ことば」というのは「語」を指すことが多いようだ。例えば、世にあまたある「○○方言集」は、方言の語、特に俚諺りげんという、共通語とはかけはなれた形を持つ語を集めたものが多い。外国語の旅行会話集のように、方言のフレーズを集めたものはそれほど多くはない。

言語学者は、常に語に関心を抱いてきたが、20世紀後半の言語学は、研究対象を、語から、文全体へとシフトさせた。ところが、不思議なことに、文の構造の新たなアプローチが進むにつれて、語に対してもそれまでなかった新しい見方が提供されることになったのだ。

ここでは、語に対する新しい見方について見てゆくことにしよう。

それでは、レッツ「語」ー！



1 「耐震強度偽装」 = 「地震に耐える強さの程度を偽装する」？

ニュースで

(1) 耐震強度偽装

という表現を一時期よく見かけた。この表現は、

(2) 地震に耐える強さの程度を 偽装する／偽装した

と言い換えることができる。ならば、(1)と(2)は「同じ」ものなのだろう

か。たぶん、すぐに「(1)は『語』、(2)は『文』」ということに気づかれるだろう。そして、この事実はあまりにも当たり前すぎて、面白くも何ともない、と思われるかもしれない。それなら、「語」である(1)と「文」である(2)とは、**何がどう違っているのだろうか**。日頃何も意識せずに使っている語について、ちょっとだけ科学的に考えてみよう。

(1)と(2)をよく見比べてみよう。(1)と(2)には共通の要素(漢字)があり、その順序もほぼ同じである。しかし、これら2つの間には確実に違いを感じるはずだ。一体、**何がどう違っているのだろうか？**

まず、長さが異なる(「何が違っているか」への答え)。さらに、(2)は(1)より10文字多い(「どう違っているか」への答え)。(1)と(2)の違いをもっと際立たせるために、さらに設問を立ててみよう。**(2)は(1)より10文字多いが、それはなぜか？**

まず多い分の10文字を、順序はそのままにして取り出してみよう。次の(3)は、(2)から(1)に現れる要素を抜き取ったものである。

(3) 地__に__える__さの程__を__する／した

(3)の「地」「さ」「程」はこのままでは意味不明である。しかし、これらは、(2)では、それぞれ、「震」「強」「度」と一緒に語を作っていたものである。これらを(3)から取り除いてみよう。

(4) __に__える__の__を__する／した

このようにして残った要素の正体は果たして何だろうか。その答えは、動詞の「活用語尾」の「え(る)」(活用はない!ということについては、4.1を参照されたい)、格助詞の「に」「の」「を」、形式動詞である「す(る)／し」、そして、「える」「する」の「る」と、「した」の「た」である。「する／した」の「す(る)／し」は、「する」が活用したものである。「する」は、出来事を表す名詞(ここでは「偽装」)にくっついて動詞をつくる。「(え)る」と「(す)る」は未来(や現在)、「した」の「た」は過去を表す時制要素である。

以上のように、(2)のような文には現れるが、(1)のような語には現れないものは、**格助詞、ムード(連体形や連用形など)**、そして**時制**である。した